

(様式2)

社団法人日本心理学会研究集会等助成金成果報告書

代表者氏名 (ふりがな)	いとう まさと 伊藤 正人	所属	大阪市立大学大学院 文学研究科心理学教室
研究集会等名称	社団法人日本心理学会第17回行動数理研究会		
成果概要	<p>1) 参加人数 (会員・非会員及び認定心理士の人数を記載してください)</p> <p>会員 21名 (うち認定心理士 3名) 非会員 6名 (うち認定心理士 0名)</p> <p>2) 集会等の目的・成果等</p> <p>本年度は、日本心理学会第73回大会の翌日(8月29日)に、同志社大学今出川キャンパスにて開催された。講演者は、和田彩紀子(大阪市立大学)、齋藤元幸(関西学院大学)、竹下遥(慶応義塾大学)、久保尚也(駒沢大学)、丹野貴行(慶応義塾大学)の5名であった。</p> <p>講演タイトルは、「価値割引から見たハトにおける利己性と衝動性の実験的研究」(和田)、「因果推論に関する最近の研究動向」(齋藤)、「確率的強化場面における選択行動」(竹下)、「ハトにおける相対的弁別学習に関する実験的検討」(久保)、「VR-VI反応率差：拡張版IRT強化理論の提案」(丹野)であり、カバーした範囲は、動物を対象としたスケジュール行動から、ヒトの因果推論まで、多岐にわたるものであった。</p> <p>「価値割引」では、衝動性と利己性を価値割引という概念によって結びつける考え方が紹介され、ハトを対象に、遅延割引と社会割引の間の相関関係が検討された。「因果推論」では、事象Aの後に一定の確率で事象Bが生じる状況下で、ヒトがこれら2つの事象の間に因果関係をどのように推論するかという問題について、これを予測する複数のモデルが紹介され、実験により妥当性が検討された。特に、Causal Bayes Netsモデルに焦点を当てた検討がなされた。「確率的強化場面」では、見本合わせ課題を用いて、基礎比率と手がかりの正確さという2種類の確率が複合した状況におけるヒトの選択行動が、確率に関するどのようなパラメータによって影響を受けているのかが検討された。「相対的弁別学習」では、大きさの異なる2種類の刺激間の弁別課題において、大きい刺激(正刺激)への反応が確立した後に、正刺激とこれよりも大きい刺激とを呈示した場合に、後者に反応する「移調」という現象について、ハトを対象とした複数の実験的研究が紹介され、移調の生起要因が検討された。「VR-VI反応率差」では、ラットを対象とした複数の実験を通して、単一強化スケジュール下の反応が、直前だけではなくそれ以前のIRTによっても規定されていることが報告され、反応を記述できる数理モデルが提案された。</p> <p>以上の講演の後には、研究内容をさらに掘り下げる活発な議論が行われ、講演者だけではなく、他の参加者にとっても有意義な研究集会であった。参加者は27名であり、盛況であった。</p>		